

森美術館 2022年度企画展スケジュール

森美術館は、現在開催中の「アナザーエナジー展」の後、以下のスケジュールで企画展を開催いたします。

Chim ↑ Pom展：ハッピースプリング

会期：2022年2月18日[金]－5月29日[日]

会場：森美術館（六本木ヒルズ森タワー53階）ほか



Chim ↑ Pom
《ブラック・オブ・デス》
2008年
ラムダプリント、ビデオ
写真：81 × 117.5 cm、ビデオ：9分13秒
Courtesy: ANOMALY and MUJIN-TO
Production(東京)

地球がまわる音を聴く： パンデミック以降のウェルビーイング

会期：2022年6月29日[水]－11月6日[日]

会場：森美術館（六本木ヒルズ森タワー53階）



ギド・ファン・デア・ウェルヴェ
《第9番 世界と一緒に回らなかった日》
2007年
ハイビジョン・ビデオ・インスタレーション
8分40秒
Courtesy: Monitor, Rome; Grimm,
Amsterdam; Luhring Augustine, New
York
撮影：ベン・ケラーツ

六本木クロッシング2022展（仮題）

会期：2022年12月1日[木]－2023年3月26日[日]

会場：森美術館（六本木ヒルズ森タワー53階）

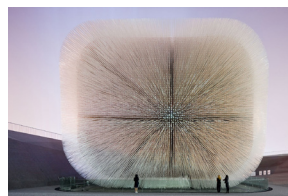


展示風景：「六本木クロッシング2016展：
僕の身体、あなたの声」森美術館(東京)
撮影：永禮 賢

ヘザウィック・スタジオ展：共感する建築

会期：2023年3月20日[月]－6月4日[日]

会場：東京シティビュー（六本木ヒルズ森タワー52階）



ヘザウィック・スタジオ
《上海万博イギリス館》
2010年
撮影：イワン・バーン

館長メッセージ

先行きの不透明な時間が続くなか、国際性と現代性を希求する森美術館は、その存在意義や社会的役割について自問してきました。世界各地で多くの展覧会が中止や延期を余儀なくされる未曾有の経験を経て、2022年度の森美術館は、これまで以上に現代アートの社会的意義を展覧会及びラーニングプログラムを通して考えていきます。

まずは2005年に結成されたアーティスト・コレクティブChim ↑ Pomの個展を2022年2月からお届けします。社会の表層に隠された歴史や無意識化された意識を体当たりのプロジェクトを通して喚起してきたChim ↑ Pomの17年間の軌跡を包括的に紹介します。続く「地球がまわる音を聴く」展では、コロナ禍以降のウェルビーイングについて、世界各地の異なる世代のアーティスト16名の実践を通して考えます。2022年度後半は、2004年から3年毎に開催してきたシリーズ展「六本木クロッシング」の2022年版を開催します。日本の現代アートの現在地を確認し、歴史を再発見する恒例の企画です。そして、2023年3月には、コロナ禍によって延期された「ヘザウィック・スタジオ展」がいよいよ実現します。森美術館では「建築の日本展」以来5年ぶりとなる建築展。2023年に開業する森ビルの虎ノ門・麻布台プロジェクトの低層部設計も担当するトーマス・ヘザウィック率いるスタジオは、今日最も革新的な建築やデザインを見せてくれる注目のクリエイターです。

森美術館は2023年には20周年を迎えます。パンデミック以降の未来を考える森美術館の活動に、どうぞご期待下さい。

森美術館館長 片岡真実

プレスリリース お問い合わせ 森美術館広報事務局（共同ピーアール内）：日比、松川、花上
Tel: 03-6264-2039 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

Chim ↑ Pom展：ハッピーズプリング

会期：2022年2月18日(金) - 5月29日(日)

会場：森美術館（六本木ヒルズ森タワー53階）ほか

主催：森美術館 企画：近藤健一（森美術館シニア・キュレーター）

アーティスト・コレクティブ^{※1} Chim ↑ Pom (チンポム)は、独創的なアイデアと卓越した行動力で、社会に介入し、私たちの意表を突く数々のプロジェクトを手掛けてきました。作品の主題は都市、消費主義、飽食と貧困、日本社会、原爆、震災、スター像、メディア、境界、公共性など多岐にわたり、現代社会の事象や諸問題に対するメッセージ性の強い作品でありながら、その多くにはユーモアや皮肉が感じられます。

また、コロナ禍において顕在化している、感染症や疫病患者に対する差別や偏見、汚染や境界といった社会問題について、彼らは、それらを予見するかのようにこれまでの作品のなかで取り上げています。その示唆に富む課題提起は、今、まさに考察に値するといえるでしょう。

本展は、結成17周年を迎えるChim ↑ Pomの、初期から近年までの代表作と本展のための新作を一堂に集めて紹介する初の本格的回顧展です。展示は、都市と公共性、広島、東日本大震災などのテーマに則して構成され、作家が一貫して考察する事象を浮き彫りにしつつ、活動の全貌を検証します。一方で、創意工夫に富んだダイナミックな展示構成により、作品に新たな光を当てることを試みます。

※1 複数のアーティストが協働する形態



《ビルバーガー》

2018年

ミクストメディア(にんげんレストランのビルから切り出された3階分のフロアの床、各階の残留物)
400×360×280 cm(左)、186×170×155 cm(右)

素材提供：にんげんレストラン、Smappa! Group、古藤寛也
個人蔵(左)

Courtesy: ANOMALY(東京)

展示風景：「グランドオープン」ANOMALY(東京)2018年

撮影：森田兼次

Chim ↑ Pom 略歴

2005年東京で結成。メンバーは、卯城竜太、林靖高、エリイ、岡田将孝、稲岡求、水野俊紀。世界各地の展覧会に参加するだけでなく、自らもさまざまなプロジェクトを企画する。2015年、アーティストスペース「Garter」を東京、高円寺にオープン。また、東京電力福島第一原子力発電所事故による帰還困難区域内で、封鎖が解除されるまで「観に行くことができない」国際展「Don't Follow the Wind」(2015年3月11日～)の発案と立ち上げを行い、作家としても参加。同年、プルデンシャル・アイ・アワードで大賞を受賞。近年の主な個展に「また明日も観てくれるかな?」歌舞伎町商店街振興組合ビル(東京、2016年)、「ノン・バーナブル」ダラス・コンテンポラリー(米国、2017年)、「平和の脅威(広島!!!!!!)」アート・イン・ジェネラル(ニューヨーク、2019年)、グループ展に、「第29回サンパウロ・ビエンナーレ」(2010年)、「アジア・アート・ビエンナーレ2017」国立台湾美術館(台中、2017-2018年)、「グローバル・レジスタンス」ポンピドゥー・センター(パリ、2020年)、「今、ここ、ルートヴィヒ美術館にて：共に歩み、共に挑む」(ケルン、2021-2022年)などがある。



撮影：山口聖巴

プレスリリース お問い合わせ 森美術館広報事務局(共同ピーアール内)：日比、松川、花上
Tel: 03-6264-2039 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

地球がまわる音を聴く：パンデミック以降のウェルビーイング

会期：2022年6月29日(水)～11月6日(日)

会場：森美術館（六本木ヒルズ森タワー53階）

主催：森美術館

企画：片岡真実（森美術館館長）、熊倉晴子（森美術館アシスタント・キュレーター）、徳山拓一（森美術館アソシエイト・キュレーター）

2020年以降、目に見えないウイルスによって日常が奪われ、私たちの生活や心境は大きく変化しました。こうした状況下、現代アートを含むさまざまな芸術表現が、かつてない切実さで心に響きます。本展では、パンデミック以降の新しい時代をいかに生きるのか、心身ともに健康である「ウェルビーイング」とは何か、を現代アートに込められた多様な視点を通して考えます。自然と人間、個人と社会、繰り返される日常、家族、病、メンタルヘルス、精神世界、生と死など、生や実存に結びつく主題の作品が「よく生きる」ことへの考察を促します。

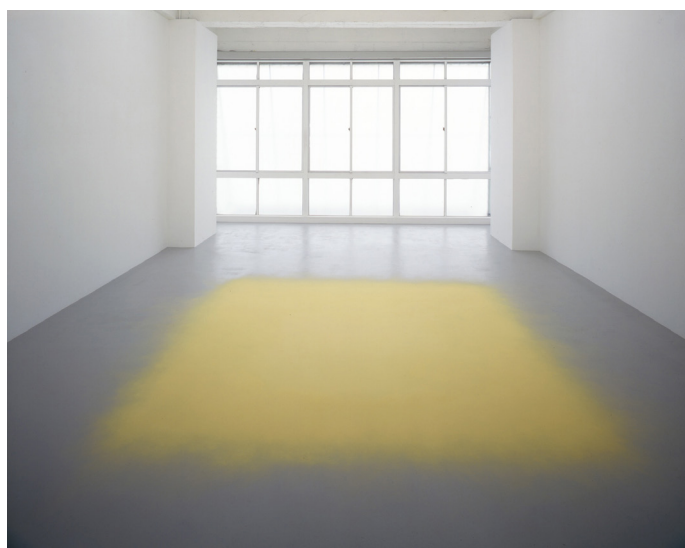
また、本展では、美術館ならではのリアルな空間での体験を重視します。五感を研ぎ澄ませ、作品の素材やスケールを体感しながらアートと向き合うことは、他者や社会から与えられるのではない、自分自身にとってのウェルビーイング、すなわち「よく生きる」ことについて考えるきっかけになることでしょう。

本展のタイトル「地球がまわる音を聴く」は、オノ・ヨーコのインストラクション・アート^{※1}から引用しています。意識を壮大な宇宙へと誘い、私たちがその営みの一部に過ぎないことを想像させ、新たな思索へと導いてくれるものです。パンデミック以降の世界において、人間の生を本質的に問い直そうとする時、こうした想像力こそが私たちに未来の可能性を示してくれるのではないのでしょうか。

※1 コンセプチュアル・アートの形式のひとつで、作家からのインストラクション（指示）そのもの、あるいはその記述自体を作品としたもの。

出展アーティスト * 姓のアルファベット順

エレン・アルトフェスト、青野文昭、モンティエン・ブンマー、ロベール・クートラス、堀尾昭子、堀尾貞治、飯山由貴、金崎将司、金沢寿美、小泉明郎、ヴォルフガング・ライブ、ゾーイ・レナード、内藤正敏、オノ・ヨーコ、ツイ・チャウエイ（蔡佳葳）、ギド・ファン・デア・ウェルヴェ



ヴォルフガング・ライブ
《松の花粉》
1998年
花粉（松）
220×240 cm
Courtesy：ケンジタキギャラリー（名古屋、東京）
展示風景：ケンジタキギャラリー（名古屋）1998年
撮影：成田 弘

プレスリリース お問い合わせ 森美術館広報事務局（共同ピーアール内）：日比、松川、花上
Tel: 03-6264-2039 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

六本木クロッシング 2022展（仮題）

会期：2022年12月1日(木)-2023年3月26日(日)

会場：森美術館（六本木ヒルズ森タワー53階）

主催：森美術館

企画：天野太郎(インディペンデント・キュレーター)、レーナ・フリッチュ(オックスフォード大学アシュモレアン美術博物館、近現代美術キュレーター)、橋本 梓(国立国際美術館主任研究員)、近藤健一(森美術館シニア・キュレーター)

「六本木クロッシング」は、森美術館が3年に一度、日本のアートシーンを総覧する定点観測的な展覧会として2004年から開催しているシリーズ展です。森美術館のキュレーターが数名のゲスト・キュレーターと共同で企画し、複数の視点の交差によって日本のアーティスト20~40名を選出します。既に国際的な活躍が目覚ましいベテランから今後の活躍が期待される新進気鋭の若手まで、また、現代美術のみならず、建築、ファッション、デザインなど、他ジャンルのクリエイターを紹介してきたことも、創造活動の交差点(クロッシング)となる展覧会を目指した本シリーズの特徴です。

現在、長引くコロナ禍により私たちの生活は大きく変化し、これまで見えにくかったさまざまな事象が日本社会の中で顕在化しています。現代美術における表現も、ある部分では変化を迫られ、またそうした世相にダイナミックに反応し始めました。シリーズ7回目を迎え、また、コロナ禍以降としてはシリーズ初の開催となる本展では、このような文脈において、日本の現代美術やクリエイションとは何かをあらためて広い視野から検証します。



展示風景：「六本木クロッシング2019展：つないでみる」森美術館（東京）
撮影：木奥恵三

プレスリリース

お問い合わせ 森美術館広報事務局（共同ピーアール内）：日比、松川、花上
Tel: 03-6264-2039 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

ヘザウィック・スタジオ展：共感する建築

会期：2023年3月20日(月)-6月4日(日)

会場：東京シティビュー（六本木ヒルズ森タワー52階）

主催：森美術館

企画：片岡真実(森美術館館長)

1994年にロンドンで設立されたヘザウィック・スタジオは、世界各地で革新的なプロジェクトを手掛ける、いま、世界が最も注目するデザイン集団のひとつです。創設者トーマス・ヘザウィック(1970年、イギリス生まれ)は、子どもの頃、職人が作った小さなものに宿る魂に心を躍らせていたと言います。建築という大きな建物や空間にも、その魂を込めることはできるのか。この問いがヘザウィック・スタジオのデザインの原点となりました。全てのデザインは、自然界のエネルギーや建築物の記憶を取り込み、それが大規模な都市計画であっても、ヒューマン・スケールを基準とするという信念に基づいています。その根底には、プロダクトや建築物というハードのデザインよりも、人々が集い、対話し、楽しむという空間づくりへの思いがあるのかもしれません。モノやその土地の歴史を学び、多様な素材を研究し、伝統的なものづくりの技術に敬意を払いながら、最新のエンジニアリングを駆使して生み出される空間は、誰も思いつかなかった斬新なアイデアで溢れています。

本展では、主要プロジェクトを「ひとつになる」、「みんなとつながる」、「彫刻的空間を体感する」、「都市空間で自然を感じる」、「記憶を未来へつなげる」、「遊ぶ、使う」の6つの視点で構成し、人間の心を動かす優しさ、美しさ、知的な興奮、そして共感をもたらす建築とは何かを探ります。



《虎ノ門・麻布台プロジェクト/低層部》
2023年(竣工予定)
東京

最新のプレス画像は、こちらの URL より申請、ダウンロードいただけます。

<https://bit.ly/3ndTOFh>

プレスリリース

お問い合わせ 森美術館広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、花上
Tel: 03-6264-2039 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp